

ダ・ダン・ダン・ダン・ダダン！

最終決定版

作..佐々木空

(定稿 2008.11.13)

石川芳恵 (46歳) 大学一年生(社会人入学)

野村奈保子 (18歳) 大学一年生

石川元気 (20歳) 大学三年生

羽賀拓也 (20歳) 大学三年生

河合みちる (27歳) 大学七年生

柏原葉子 (24歳) 大学演劇部のOB

【1】

ターミネーター2のテーマが流れる中、6人の男女によって、なにやら奇妙な儀式が行われている。

「満月の儀」と呼ばれるその儀式は、「鈿女垂乳根命（ウズメタラチネノミコト）」という御神体を崇め奉る儀式である。御神体・鈿女垂乳根命は舞台ほぼ中央の上位に祀られており、その姿は乳房を露わにしたリアルに艶めかしいトルソーのようなものである。

儀式は、メグミルクとひよ子饅頭をお供えし、御神体の隠すように被せてある白い布（「包胸の白布」）を取り除けるといいうものである。終始厳かに進行する。

「包胸の白布」を取り除け、乳房のトルソーが現れたところで、
暗転

【2】

多良知（たらち）美術音楽大学、略して「多美音（タミネ）大」の演劇部の部室
オリエンテーションの日4月6日（午前中）

部室には、中央にミーティングのときに使うのであろう机、上手奥には部室入口の扉、背面窓の前にはいくつもの棚が置かれており、その中には、演劇で使うと明らかにわかる物品や、およそ演劇とは関係ないと思われる物品で埋まっている。やたらと空缶や洗濯バサミで散らかっている部室には、空缶や洗濯バサミでつくったオブジェらしきものが散乱している。その他、照明器具や衣装棚などが無造作に整理されることもなく置かれている。下手奥にはデスクトップのパソコンとプリンターが設置してある。

チャイムの音。

明転（フェードイン）

一人の男・河合みちる(27)が、パソコンデスクのところであたたかみを感じている。その頭には「包胸の白布」らしきものが被さっている。

目が覚めるみちる。白布に気づき、それを戻そうと、ご神体の前に行く。見上げると露わな乳房。ぼーっとそのおっぱいを見つめるみちる。いつの間にか、たらーと出てきた鼻血に気づき、とっさにそれをその白布でふき取る。

みちる うう、うあ……。

慌てて部屋を出ていくみちる。布を洗いに行ってたようだ。
濡れた白布を持って戻ってくる。

みちる …汚しちゃった。

白布を汚してしまったみちるは、思案するが解決策が見つからない様子
そこに石川元氣(20)が入ってくる

元氣 おつかれーっす。

みちる お疲れさま。

といいながら、慌てて、白布を腹の下にしき、背筋運動をはじめるみちる

みちる (背筋をしながら) いち、にい、いち、にい…。

元氣 みっちー先輩、何やってるんですか？

みちる いやあ、背筋鍛えようと思ってね。ハガタクみたいにさ。

元氣 ダメじゃないですか。みっちー先輩。

みちる (白布のことを言われているんじゃないかと…) なにが？

元氣 なにがって、ビラ配りに行かなきゃですよ。背筋鍛えてる場合じゃないですよ。

みちる あ、ああ、配りに行かなきゃって思ってたところだよ。（ごまかし、落ち着かない様子）

元氣 （元氣、空缶のオブジェを見て）…またやってるんですか、

みちる えっ、何が？

元氣 何がって、それ、それ。

みちる ああ、これね、うんまあ。

元氣 卒業製作なんかですよ。

みちる 空き缶のブリコラージュさ。

空き缶を数えながら積むみちる

元氣 先輩が作っていると、なんか、こう、趣深いものを感じますね。これって、結局なんなんですか？

みちる ……そうだね、なんか缶を積むことによって、なんていうのかな、青さっていうのかな？ この不安定さが、今の若者の不安定さをあらわしているんだよ…。

元氣 まんまじゃないですか。みっちー先輩のまんまじゃないですか。みっちー先輩は、缶よりも、まずちゃんと、早く社会に飛び込んで、実社会の経験をつむところから始めたほうが、いいんじゃないですか。

みちる 元氣くんこそまず、努力を積み重ねることだね。

元氣 積んでますよ。努力！っていうか。オレ、むしろ努力しか積んでないくらいですよ。

みちる そういうことにしようか。

元氣が、棚に鞆を置きに行き、ご神体の近くの洗濯バサミの引き出しを開けようとする
みちるは、白布が入っていないことに気づかれるのではないかと、慌てて駆け寄る

みちる どうしたの？どうしたの？

元気 どうしたのって、なんですか。

みちる なに？探しもの？

元気 もう、洗濯バサミですよ。

みちる なんだ、これね、言ったら取ってあげたのに。

みちるが洗濯バサミの入った引き出しを元気に渡す。

元気 取ってくれたんですか？なんですかその気遣い。

みちる なんでもないよ。ほら頑張って。

元気 はーい。今度は何作ろうかな。じゃあ、みっちー先輩も缶積み頑張ってくださいね。

元気は中央の椅子に座り、洗濯バサミで花らしき物を作ろうとする。

みちるはパソコンの前に座り、白布をどうするのか考え、元気に気付かれないように白布の棚に近づく。

元気 先輩。

みちる (驚いて) う、うん、何？

元気 拓也どこ行ったんですかね。

みちる さあ。

元気 ビラ、配り行かなくちゃいけないのに。

みちる あっ、そうだ。元気くん先にいってくる？

元気 ええー。俺、これ終わらないと行けないですよ。

みちる 終わるの？

元気 あと少しで終わるんです！！

みちる そう。じゃあ、頑張って。

元氣引き続き、洗濯ばさみで花らしきものをつくる
みちる、白布をどうするのか考えている

元氣 ああー、みちる先輩…。俺・・・役者としてやっていけるんですかね？
みちる 卒業したら東京行くんだよね？

元氣 そーなんですけど・・・俺、正直東京行くの怖いんですよ。

みちる 言っとくけど、僕は一緒に行かないよ。

元氣 ええー。俺とみちる先輩は家族みたいなものじゃないですか。ルームシェアしましょうよ。

みちる うーん。拓也くんとすれば？ルームシェア。

元氣 うえー。あいつと一緒に住むなんて考えただけでぞっとしますよ。

みちる (笑いながら) そっか。

元氣 それより、みちる先輩は卒業したらどうするんですか？っていうか、卒業できるんですか？

みちる そりゃ・・・。

元氣 あと何単位足りないんですか？

みちる 32単位くらい・・・かな。

元氣 「くらいかな」って卒業する気ほんとにあるんですか。

みちる あるよ、そりゃ・・・。

元氣引き続き、洗濯ばさみで花らしきものをつくる

みちる、白布をどうするのか考えている

元氣 みっちー先輩。今年新入部員入りますかね？

みちる うーん。どうだろうね・・・。

元氣 今年一年生入ってくれないと、演劇できないですよね。
みちる 最低二人は欲しいよね。原則5人いないと廃部だから。

元氣 俺、下いないっすよ。今年こそ後輩ほしいですよ。

みちる …大丈夫だよ。

元氣 みっちー先輩、大丈夫って毎年言ってますけど……。

みちる 今年は入りそうな気がするから。

元氣 「気がする」って……。本気で新入部員入れる気あるんですか？

みちる 大丈夫だって。

元氣引き続き、洗濯ばさみで花らしきものをつくる

みちる、白布をどうするのか考えている

松田先生に履修のことで呼び出されていた羽賀拓也（20）が戻ってくる。

拓也 チョリーツス。一年生のオリエンテーション終わったらしいよ。

元氣 そうなんだ。そろそろビラ配りにいかなきゃな。で、お前どこ行ってたんだよ。

拓也 （ビラ配りの準備をしながら、カツラをかぶって、募集の看板とビラを持って）ち

よっと松田先生に呼び出しくらってき、研究室にいつてきたらしいよ。

元氣 どうせお前、また成績のことだろ。

拓也 単位が足りない、らしいよ。

元氣 どんぐらい足りないんだよ。

拓也 32単位くらい、らしいよ。

元氣 拓也、お前ちゃんと必修取ってんのかよ。

拓也 全然、取ってない、らしいよ。

元氣 らしい、らしいって、お前のことだろ。

拓也 そうなのかな。

元氣 じゃあ、おれのことかよ。

拓也 うーん、。

みちる いや、たぶん、僕のことだと思うよ。

拓也 じゃあ解決。俺たちビラ配りにいつて来ます。みちる先輩もいきます？

みちる 僕はいいよ。

拓也 元氣いくぞ。

みちる 元氣くんも一緒に行くんでしょ？

元氣 (洗濯バサミの花らしきものを作りながら) おれ、これ終わったら…。

みちる そんなの後でもできるよ。

元氣 じゃ、みちる先輩行ってきたくださいよー。

みちる (苛々しつつもしょうがないなという感じで) じゃあ、拓也くん、先に一人で行つ
といて。あとですぐ行ってもらおうから。

拓也 とびつきり可愛い期待の新人ゲットしてきます！

みちる (ちよつとあきれながら) お願い。

拓也 うい、むっしゅ！

拓也、ビラと看板を持って勧誘に行ってくる

みちる、パソコンに向かってる。

元氣 … (元氣が席を立つ)

みちる どうしたの？元氣くん

元氣 みちる先輩…。

みちる なに？

元氣が、壁に掛けてある洗濯バサミの銃をとり、もうひとつをみちるに投げ渡し、それで銃
撃戦を繰り広げる。

元氣 …ずばーあん。

みちる びびびび。

攻防を繰り返すふたり

みちるが負ける

元氣 もっと修行を積んでくださいね。

みちる 覚えてるよう。

元氣 先輩、洗濯ばさみのことどう思います？

みちる ……どう思う？

元氣 俺、「現代美術実習」で、「日常生活用品でアートを作る」って課題出たとき、すぐ

に、洗濯バサミが思い浮かんだんですよ。子どものころよく一人で、洗濯バサミを組み立てて、遊んでたし(笑)

みちる ひとりでどうやって遊ぶんだよ。僕なんか、缶けりしてもいつも鬼ばっかしでさ、いつも蹴られた缶 拾いに行ってたよ。

元氣 その頃から空缶集めてたんですか？

みちる てなわけ…、あるかも？

元氣 (みちるの話を聞いてなんだか自分の話をしたくなる) 俺、すごい洗濯ばさみ好きなんですよね。

みちる ……。

元氣 俺だけかもしれないですけど、洗濯ばさみってなんか哀愁感じませんか？あの日に色あせていくプラスチックの色とか、紐とかにぶら下がってる感じ？あれ俺大好きなんですよ。

みちる へー。

元氣 そんなで、使い古された洗濯ばさみをこう、とって臭いをかぐとなんか変な臭いがあるんですよ、なんか汗臭いっていうのかな、太陽の光浴びたプラスチックのにおい？なんかほっとするっていうか……。あれ俺好きなんですよ。二日に一回は嗅いじゃいますもんね、うん。

みちる なんかわかる気がする。

元氣 わかります！？ やったー、初めて共感する人に出会いましたよ。

みちる ああ、そう。

元氣 二人で、臭いましょう。

氣持よさそうな二人

元氣 この臭い、この臭いなんです。(と言いながら恍惚とする。すると勃起してしまう)
みちる ……。

元氣 あっ、ちょっと、トイレ行ってきますね。

みちる ずっといれ。

元氣 寒っ。

元氣トイレに駆け込む。

布が入っている引き出しを見て、思案に暮れている様子のみちる

【3】

そこに、一人の女性が入ってくる。石川芳恵(あ)である。明らかにおばさんである。

芳恵 (元氣に・様子を探るように) すいませーん！ここって演劇部ですよ？
みちる (動揺しながら) は、はい、そうですけど…。

芳恵はみちるの存在に無頓着で、部屋にズガズガと入ってくる。

そんな芳恵にどう対応していいかわからないみちる。

芳恵 ふーんここが演劇部かあ…。

芳恵は洗濯バサミで作った元氣の作品に目がいく。少し呆れた風である。

芳恵 （洗濯ばさみをみて）これって演劇の小道具？

演劇部の部屋に置いてある物品に関心がある様子の芳恵。いろいろな物に遠慮せず触ろうとする。突然の侵入者の行動をおたおたと静止しようとするみちる。

芳恵 （照明を見て）これは照明やろ（太鼓をみて）これ何？、何に使うと？（衣装をみて）

へー、結構衣装も揃つとるんやね。（羽根マフラーを見つけて）ええーなんこれ、あたしこういうの好きなんよ。ちよとかけてみていい？「はい！どうぞ！」ありがとう！…はっ！あたしって瀬川英子みたい。

みちる で、どちらさまですか。

芳恵 ああ！、どちらさまで、多美音大の学生に決まってるでしょ。

みちる 学生…。

芳恵 社会人入学です。花の女子大生に向かって、まあなんて失礼な殿方かしら。

みちる ああ、つてことはサークル見学か何かですか？

芳恵 うーん、そんなとこかな、じゃ、誰もいないみたいなんでまたあとで来ますね。（といて、羽根のマフラーをみちるの首を巻きつける）

みちる あ、はい。

芳恵 出ていく。

芳恵がいなくなりほっとするみちる。首に巻かれたマフラーを戻そうとする。鏡にその姿が写り、瀬川英子の真似をするみちる。

そこにピラ配りに行っていた拓也とトイレに行っていた元気が途中で合流し、話しながら部屋に入ってくる

拓也 元気。（にやけて）見つけちゃった。超かわいい子。

元気 お前なにやってんだよ。

拓也 その子、おとなしそうな子なだけどさ、なんか周りのチャラチャラした女どもと

はオーラが違ったんだよ。きつと名前は梨華ちゃん。

元気 梨華？

拓也 苗字は？…絶対石川やな。

元気 石川梨華！俺と一緒に苗字じゃねえか、おれの妹かよ。

拓也 お前妹いねえだろ！

元気 そうだな。ははは。

拓也 きつと梨華ちゃんは…北海道生まれの雪のように純粋な子。まさに白い恋人だよ。

（小芝居）それは、雪の降るクリスマス夜の夜。俺はクリスマスのスペシャルライブを終え、ファンの女の子に囲まれながら、楽屋を出た。でも、俺はそんな女どもには見向きもしない。おれの気持ちは梨華に一直線さ。それを知ってか知らずか、梨華はおれのことをずっと待ってる。頭に雪なんか積らせちゃってさ。そこで俺は…、

拓也 「待たせて悪かったな」

梨華 「ううん、別に」

拓也 「寒かっただろう」

と言って俺は梨華の手を握り締める。梨華の手は氷のように凍えてる。でも梨華は、俺の目をまっすぐに見つめてこう言うんだ。

梨華 「（吐息が混じりながら）…きもちいい、拓くんの手、あったかい。で、きょうどこのホテル行く？」

そんな子なんだ、梨華ちゃんは、きつと！！

元気 お前え、アホか！ そんな純心かつそそられる子、いるかよ。

みちる （諭すように） そんな妄想ばかりだから、現実の女の子には逃げられてしまうんだよ、拓也くん。

拓也 そーなんですかあー。

元気 気づくのおせーよ。こないだの好子ちゃんだって、そうだっただろ。だから痛い目にあっただよ。

みちる よくそんな、次から次に「恋の妄想」できるね。尊敬するよ。

拓也 そうやって、男は別れを繰り返すことによって、愛を積んでいくんだよ。

元気 愛を積む？ 積みばいいってもんじゃないだろ？

みちる 愛を積むときの不安定さがたまらない。

元気 壊れなきやいいんだけど。 でも、そうはいかない。 ですよ、みちる先輩！

みちる (うるたえながら話をそらすように) そういえば、さつき見学に女の人がきたよ。

拓也 女！？ 梨華ちゃんだ！！

元気・みちる 違うって。

保険会社に勤める演劇部の 〆 柏原葉子 (25) がスーツ姿で入ってくる。

葉子 先輩が登場したわよー！

元気 先輩っ！？

葉子 うえ男ばっか。 くさ。(ハンカチで口を押さえる)

拓也 先輩どうしたんすか？

葉子 どうしたって、あんたたちが臭いから、ファブリーズかけてんのよ

拓也 何しに来たんですか

葉子 何しに来たって、私はここにきちやいけないの？

元気 いや、だから、あの、先輩は今日はどうしてこちらに？

葉子 見てわかんない？ 仕事よ仕事、先生のところにご挨拶。(パソコンをしているみちるの顔を覗き込んで) あんた、なにやってんのよ。(椅子に座っている元気と拓也の背中を叩きながら) あんたたちはなにボーっとしてんの？

拓也 さつき、ビラ配ってきたんですよ、先輩。

葉子 ふーん、それで？ 新入部員は入ったの？

元気・拓也 ……いいえ。

葉子 新入部員！ 新入部員いれなさいよ。 じゃないとつぶれるわよ。 この演劇部！ うえ。

女の子いれないと、男くさくてたまらんわ。

みちる だから、さつき、女の人入ってきたって。

葉子 え！そうなの？

拓也 女！？梨華ちゃんだ！！

ノック音

芳恵 すいませーん。(声のみ)

拓也 梨華ちゃんだ！！！！

葉子 梨華ちゃん？

拓也は梨華ちゃんと思いこみ満面の笑みで、お出迎えの準備をする

拓也 ごっほん、(さわやかに) はい。

喜びでいっぱい拓也はドアを開ける。しかし、期待とは違い、ドアの向こうにはおばさん

(芳恵)の姿。見てはいけないようなものを見てしまったかのように、ドアを閉める。

元気はまさかの母親の登場に驚き席を立ち部室の隅に移動する。

芳恵は閉められたドアを開ける。

芳恵 あの…。

拓也 (期待はずれの顔で部員に) 誰！このおばさん。

芳恵は拓也に嫌な顔しながらも笑顔でみちるに向かって

芳恵 先ほどはどうも。

みちる ああ。

葉子 知り合い？

みちる さっき話した…。

葉子 もしかして入部希望の方ですか？

拓也 おえっ！……（必死に）うちの部、年齢制限あったよな、元気。

元気 （必死に）そう！そう！

葉子 そんなのあったっけ？

拓也 今作りました。

芳恵 あら、じゃあ入部は無理ね。

葉子 いえいえ、大丈夫ですよ。いいじゃない入れても。おばさんの役してもらえばいいじゃない！

元気・拓也 ええー。

芳恵 実はもう一人いるんですけど。

葉子 そうなんですか！？

拓也 （座り込んで）はあ、また、おばさんかよ。

芳恵 奈保子ちゃん。

【4】

もじもじしながら、野村奈保子（18）が入ってくる。

拓也 梨華ちゃんだ！！！！

元気 奈保子ちゃん！？

葉子 あら、知り合い？

元気 ええ，近所の子ですよ。演劇部に勧誘はしてたんですけど…。

葉子 やるじゃん，元気！

元気 いやあ。

拓也 どんな関係だよ。

元気 だから，近所の子だよ。

拓也 ほんとにかあ？

芳恵 私のお友達の娘さん、奈保子ちゃんです。一緒に入学したんだよねー。

奈保子 …はい

葉子 ってことは、(芳恵を指して)この方とも知り合いなの？元氣

元氣 えっ、知らないですよ。(芳恵に向って)こんなお・ば・さん。

芳恵 (元氣をにらんで)おばさん？

葉子 でも、よかった、二人も女の子が入ってきてくれて。

拓也 (芳恵を見て、どう見てもおばさんだろうという表情で)女の子？

芳恵 ぴちぴちの18歳です。ほら、あんたもやんなさい。

奈保子 (恥ずかしがりながら)…です。

拓也 (冷静に、元氣に向かって)さば読むのにもほどがあるよな。

芳恵 何言ってるのよ。花の女子大生なんだから。

拓也 それに比べて……。奈保子ちゃん？

奈保子 …野村奈保子です。

芳恵 石川芳恵どえーす。

拓也 あんたには聞いてないよ。

葉子 バカ。(拓也をはたく) 石川さんっておっしゃるんですか？じゃあ元氣と一緒にね、

石川元氣、共通点多し！だね

元氣 ……。

芳恵 (わざとらしく)ええー！そうなんですか、奇遇ですね。じゃあ、私のことは芳

恵って呼んでください。

葉子 はい、芳恵さん。私はこの演劇部の〇〇なんです。今は保険の営業してます。ほら、

あんたたち、自己紹介しなさい。じゃあハガタクから。

拓也 羽賀拓也です。三年生です。(芳恵に向かって)好きなタイプは、若い子です。

芳恵 あんた、喧嘩売つとると？

葉子 バカ、(拓也を叩く)はい、元氣。

元氣 石川元氣です。三年生です。どうも…。

芳恵 (元氣に向かってわざとらしく)よろしくね。

葉子 次、みっちー。

みちる 河合みちるです。…七年生です。…みっちーって呼んでください。

芳恵 みっちー！！！！

葉子 はーい、なんか雰囲気つかんだわね。あっどうも（芳恵・奈保子に）さっきも言いましたけど、私、演劇部の〇〇の葉子っていいです。もう大学を卒業して、保険の営業をしているんですけど、こいつら頼りにならないから、ちよくちよくここに來てるんです。なにより、私、演劇大好きなんです。

芳恵 あらあら、すっかり演劇に取り付かれちゃったのね。

葉子 そうなんです。芳恵さん、芳恵さんはどうして演劇部を選んだんですか。

芳恵 あたし、演劇とかしたことないんですけど、（元氣を見て）息子が演劇をして、それで氣になって。

葉子 あら、息子さんが。ぜひ会ってみたいですね。

芳恵 （元氣に向かつて）今度連れてきますね。うふふふ。

元氣 （余計なこと言うな！という顔）……。

葉子 奈保子ちゃんはどうして演劇部に入ろうと思ったの？

奈保子 （元氣のほうを見つめて）……。

元氣 あ、俺が誘ったからです。

葉子は奈保子が元氣を見つめている様子を見て、奈保子が元氣のことが好きなんだとわかる。

葉子 あー、なるほどね。

芳恵 なにもわからないけどよろしくおねがいしますね。

葉子 （みちる・元氣・拓也に）よろしくおねがいしますって、あんたたちも言いなさいよ。

元氣・拓也・みちる よろしくおねがいします。

葉子 じゃあ、入部届書いてもらいましょうか。じゃあ私、芳恵さんに説明するから、あんた奈保子ちゃんやっというて、

元気は奈保子以外に会話を聞かれないように話す。

元気 奈保子ちゃんどういふこと？

奈保子 なにが？

元気 どうもこうもないよ。奈保子ちゃんは誘ったけども、なんであの人が一緒なの？

奈保子 わかんないよ、でも、歌って踊れる役者になるって言ってたよ。

元気 おお、どうにかしないと。

奈保子 ……。

元気 そうだ！あの人と一緒に他のサークルに行ってみれば？

奈保子 え…。そんな…。私、大学入ったら、元気兄ちゃんの演劇部に入るって決めてたの

…。

元気 ええー、もう、ったく、あの人は…。(思いついて) そうだ：葉子先輩、いいんです

か？先生のところに行かなくも。

葉子 あっ、そうそう忘れてた。あたし、遠藤先生のところに行かなきゃ。(芳恵に向かって)

すみません。元気、後は頼んだわよ。

元気 あ、はーい。いってらっしゃい。

皆 いってらっしゃい。

葉子 遠藤先生の研究室に保険の勧誘に行く。部室を出る時、手に持っていたYのイニシャルがついたハンカチを鞆にしまおうとして落としてしまう。それを見ているみちる。みちるはそれを拾い考えている。

元気 なあ、拓也。お前、あれだよ奈保子ちゃんを学校案内に連れっててやれよ。な。

奈保子 えっ…。

奈保子は元気に行きたくないという素振りをするが、元気は無視して、奈保子を拓也のほう

に押しやる。

拓也 まじで、うん、そうだな、これは連れて行ったほうがいいな。うん、それが先輩としての役目だな。うん。

芳恵 じゃあ、私も、案内してもらおうかしらね。

元気 お、おばさんには、ちゃんと案内係を用意してますから、イ・ケ・メ・ンの。

芳恵 あら、気がきくわね。

元気 じゃあ、いつてらっしゃーい。(拓也にサインを送る)

拓也 (勘違いしてサインを送り返す)

奈保子は嫌々ながら拓也に学校案内に連れて行かれる。

元気 よしと、…えっと、みちる先輩。

みちる なに？

元気 ちょっと缶つみに使う、缶集めにいなくていいんですか？

みちる えっ？、、、ああ、もうそんな時間か。

元気 いってらっしゃーい。

みちるは缶集めに出かける

元気はどうか全員外に出したと、落ち着く

一方でイケメンの案内係が来るのを本気で喜んでる芳恵

芳恵 イケメン・イケメン♪

【5】

芳恵 もうイケメンはまだね。イケメンは。

元気 かーちゃん！！聞いてらんよ
なんが？

元気 演劇部に入るなんて聞いてない！！

芳恵 聞とるわけないやん。ゆーとらんもん。

元気 同じ大学に母さんがいることもいやだったのに……。約束したやん。宝塚サークルに入るんじゃないかったと？

芳恵 気が変わっただけだ。

元気 いい？演劇部入らんでよ！！

芳恵 落ち着いて、落ち着いてよ。ちようどいいやん。ほら、あんた親子で演劇。あれよ、あれ、松本幸四郎と松たか子みたいなもんよ。かつこよかろうが。

元気 かつこいいもなんもないやろ！もおー。

芳恵 もう、男がピーチクパーチクうるわくいわんと。

元気 そういう問題じゃない。いい、とにかく。親子だつてことは絶対内緒やけんね。

芳恵 もう、わかつとーつて。

元気 もう、どうしよー。

ダンス

【6】

昼休み

元気は冷蔵庫からプリンを出し食べる。

みちるは空き缶を積み上げている。

元気 でかいですね。先輩

みちる ここまで来るのに7年かかった

元気 留年してた理由はそこだったんですか？

遠藤先生の勧誘に失敗した葉子が落ち込んで帰ってくる。

葉子 おつかれー。

元気 あっ、葉子先輩、どうでした。先生のところ。

葉子 …だめ

元気 だめって。

葉子 だめなもんはだめなのよ。

元気 まあ、あれですよ。保険会社にも不況の風が吹いてますもんね。

葉子 あんたに何がわかんのだよ。

元気 なんかイライラしてますね。

葉子 あんたも社会人になったらわかるわよ。

元気 なんかイライラしてますね。(冷蔵庫を開けながら) プッチンプリン食べます？

葉子 たべる…。

葉子・元気はプリンを食べている

葉子 ねえ、芳恵さんと奈保子ちゃん？

元気 さあ、芳恵さんはどつかでぶらぶらしてるんじゃないですか。奈保子ちゃんは拓也が学校案内に連れて行きました。

葉子 えー、奈保子ちゃん大丈夫？ハガタクうざいからね。てか、元気いいの？奈保子ちゃん(にやけて)

元気 え？

葉子 奈保子ちゃんはあるたのこと好きなんじゃない？ま、私の勘だけど。

元気 違いますよ、二個下ですよ。俺にとっては妹みたいな感じですよ。

葉子 ふーん。つまんないの。

元気 からかわないでくださいよ。

みちる　じゃあ、この塔に名前をつけようか。

葉子　じゃあ、私考えてあげる。(適当に)とうとうできあがったので「とうとうの塔」っていうのはどう？

元気　ただのダジャレじゃないですか。だめですよ。

葉子　えー。

元気　そもそも、缶積み上げてるから、せめて「カン」ってつかないと。

葉子　あーね。じゃあ、・・・みかん。

元気　適当ですね。じゃ、おかん。

葉子　予感。

元気　羊羹。

葉子　リンカーン。

元気　太宰府カーン。

葉子　おさかん。

元気　そういうことに敏感。

葉子　こかん。

元気　女性がそんなこと言ったら・・・いかん！！

葉子・元気　(笑)

みちる　よしっ、関東軍でいこう。

葉子　えー！なにそれ、ぜんぜん関係ないじゃん。私たちがせっかく考えてあげてたのに。意味ないじゃん！

元気　で？関東軍？なんですか、それ。

みちる　ごほん(咳払いをして)：関東軍とは。満州に駐屯していた日本陸軍部隊のことで日露戦争後、関東州と、南満州鉄道の権益を保護するために設置された関東都監府を前身とし、大正8年(1917)独立。第二次大戦の末期に、ソ連軍の侵攻により壊滅したとされる部隊のことだよ。

元気　へーなんか良くわかんないんですけど、意味あるんですか？

葉子　最後に壊滅したって言ったでしょ。

元気 いいましたね。

みちる ってことは……。

葉子 ファイツ！

葉子が缶の塔を倒す

みちる ああ……。僕の七年間が……。

元気 なにするんですかあ。

葉子 だって、なんだかこういう、不安定なものって壊したくなるんだもん。

元気 みっちー先輩がどんな思いで作ったと思ってるんですか。

葉子 しょうがないじゃない、我慢できなかったんだから、壊れてわかる愛があるでしょう。

みちる ないよ。

元気 もう、みちる先輩なんて、このために留年したんですよ。それを簡単に「ファイ！」ってそりゃ人がわるいですよ。

みちる この関東軍も僕の学生生活もここまでの命だったってことだよ。

元気 みっちー先輩がいいならいいですけど……。

みちる 元気くんだってあっただろ。（子どもの頃、思い出しながら）子どもの頃、公園の砂場で、夢中になって砂の城みたいなものを作ったことが。やっと完成したときには、もうすっかり日も暮れかけててさ。気がつくともう誰もいなくなってた。僕は、砂の城をそのままにして、帰った。次の日、砂場に行くと、もうほかの子達がいってさ、一緒に別の城を作ってた。僕のつくった城は壊されていたんだ。

元気 （子どものころを思い出しながら）俺はだれにも負けないくらいでっかい砂山を作ってたね。中にトンネルを掘って、で、川なんかも作って。そのあと、それが終わったら何もやるものがなくて、最後にはいつも壊してました。あれすっきりするんですよ。

みちる 作る時は、壊れないように壊れないようにって作るのに。

葉子 そんな永遠のものなんてあるわけじゃない。

元氣 でき、トンネル掘る時慎重にしないとだめなんですよね。

葉子 あれ、一人で掘るの結構難しいよね。

元氣 二人で掘るとうまくいくんですよ。砂山の両側から掘り始めて、「あとちょっと、あとちょっと」って言いながら、砂山の中でお互いの手を握ったときの感動。あれがあるから何度でも作っちゃうんですよ。

葉子 私はね、公園で子どもたちが作った砂山を子どもたちがいなくなったところをみはからって、その砂山の大きさをぐらいの穴を砂場に作ってやったわ（自慢げに）。

元氣 それはただの嫌がらせですね。

葉子 それでね、次の日、子ども達はさも、昨日の砂山のことなんか忘れたかのように、

また、砂山を作り始めたの。

みちる あれだね、あの頃、砂遊びは毎日繰り返していることにこそ意味があったんだろうね、きつと。それが積み重なって子どもの思い出がつくられるんだと思う。

元氣 そうなんですかね。

葉子 そうなのよ、子ども達は何度でも砂山を作り続けるのよ。何度でもね。飽きることなく…。

元氣 犬の糞が砂の中に入っていようと掘り続ける。

みちる 穴を掘りすぎて、下のコンクリートに到達してしまっても掘り続けるんだ。

葉子 なんだか、そこまでいくとホラーに変わるわね。ははは・・・まあ、そんな夢を昨日見たっていう話なんだけどね。

元氣 夢なんですか？

葉子 今日は新月の儀式の日ね。ひよこ買った？

元氣 あっ、忘れてました。

葉子 何やってるのよ。

元氣 俺、じゃあ、買ってきますね。みっちー先輩、メグミルク買ってきてくださいね。

じゃー！

葉子 じゃーねー。

元気慌てて部室を出ていく
そのあと、みちると葉子は儀式の準備をする

葉子 さ、準備、準備。

みちる なかなか深い話だったね。

葉子 でしょ。

みちる 子どもの頃、よく砂山作ったなあ…。

葉子 うーん、私も、よく作ってた。(明るく) 小さいころ一人遊びが好きで、一人で砂場で大きい、砂山作ってた。でも、次の日、砂山が誰かから壊されてたらむかつくから、自分で壊してやったわ。

みちる くらい、くらいーい子ども時代だったんだね。

葉子 どこが暗いのよ。ぜんぜん暗くないじゃん

みちる (葉子のことを分かっているように) そ。

二人の間に、気まずい空気が流れる。葉子は、自分の気持ちを見透かされたようで……。

葉子 あっ、私チーフに連絡してくる。

葉子部室を出ていく。

みちるが葉子のくのイニシャルが入ったハンカチを引き出しの中に入れ、部室を出ていく。

7

拓也と奈保子が学校案内が終わり戻ってくる

拓也 最初は迷っちゃうらしいけど、迷ったら俺に電話して。まあ、先輩としては、大事

な後輩を迷わせることは、絶対させたくないから。それが先輩としてのプライドだから。

奈保子 …あ、はい

拓也 あつ、そういえば携帯の番号聞いてなかったね。教えてくれたら嬉しいらしいよ。いい？

奈保子 …いいですけど

拓也 じゃあ、赤外線送信するよ。ビビビビビビ…。

拓也、いかにも光線を送るように、送る

拓也 きた？

奈保子 あつ、はい。

拓也 おれの気持ちも届いちゃったかな？

奈保子 …。

拓也 よし、じゃあ赤外線受信するよ。君の気持ちも受信するよ。

受信するときも、光線を受け止めるように受信する

その様子に引き気味の奈保子

奈保子 ……。

拓也 よし、これでいつでも俺と繋がっていられるわけだな。

奈保子 …そうですね。

拓也 よし、飯食おう。売店に買いに行く？

奈保子 私、お弁当作ってきました。

拓也 お弁当？なんか悪いね。

奈保子 先輩のはいですよ。

拓也 あ・・・知ってるよ。笑

拓也 はい、いつも使っている、神聖なる白布を引き出しから取り出し、
よだれかけにしている

奈保子 そんなんですか？

拓也 プロテインらしいよ。

奈保子 ……。

拓也 (プロテインを作りながらかつこつけて) 奈保子ちゃんって、どこに住んでんの？
奈保子 ……えーっと…学生寮に住んでいます。

拓也 元気の家と本当に近いんだな。

奈保子 はい…。

拓也 元気とどんな関係なの？

奈保子 …お兄ちゃんみたいな感じです。

拓也 あいつ卒業したら東京行くんだよな。

奈保子 えっ…。

拓也 あいつもよく決心したよな。役者になるって。 あ、そういえば、あそこの寮の近
くにほらストロベリーなんとか、ってあるだろう？

奈保子 (うなづく)

拓也 あそこのシュークリーム、中がトロっとしてて、外がカラっとしてておいしいんだ
よな。今度一緒に食べに行こう。

奈保子 ……。

拓也 ねえ、奈保子ちゃんって、兄弟いるの？

奈保子 えーと。

拓也 ちよっとまって、当てるから、当てるから、まって、まって。

奈保子 ……。

拓也 弟いるでしょ。

奈保子 いません。

拓也 じゃ、姉ちゃん？

奈保子 いいえ。

拓也 じゃあ、兄ちゃんだ。

奈保子 違います。

拓也 じゃあ、じゃあ、妹。

奈保子 兄弟いません。

拓也 じゃあ、一人っ子だ、あたりー！いえーい

間

奈保子 羽賀先輩は？

拓也 あててみてよー。

奈保子 うーん…一人っ子じゃないですか。

拓也 ……正解。

奈保子 一緒ですね。一人っ子。

拓也 うん、でも…実は、はずれだな。

奈保子 えっ？

拓也 俺、親の本当の子じゃないらしいんだ。生まれてすぐ、里子に出されてさ、親からは、お前には双子がいるって聞いたことはあるけど、そいつがどこのどいつなのか、全然わからないんだ、いつか会ってみたいな双子に…

奈保子 そうですか…、きっと会えますよ。そう思って、思いを積みあげていけばきっと…
(自分の生い立ちを思いながら)

拓也 ん…

奈保子 そっくりなんじゃないですか、会ったら、すぐわかったりして。
拓也 そうかな。

その場が静かになる。奈保子は話が续かなくてどうしようと思い静かにしている。が、拓也はその静けさをキスのチャンスだと誤解をする

じつと顔を下にしてゐる奈保子の横顔をつばを飲み込みながら見つめる拓也。プロテインを手を持ったまま奈保子の肩に手をかけ唇を突き出しキスをしようとする。奈保子は何が起きようとしているのか理解するのに時間がかかる。近づく拓也の顔を見て突き飛ばす

奈保子 いやっ！

拓也 ……冗談だよ冗談（苦笑）。こぼれちゃったね……。拭かなきゃ。

奈保子 ああ、すみません。

拓也 いいよいいよ。ああ、拭くものがないな。

奈保子 あたしティッシュ持ってます。

拓也 いいよ、これで拭けば。

奈保子 いいんですか、それで拭いても。

拓也 大丈夫・大丈夫。俺がいつていつてんだから。

奈保子 わかりました。

拓也は前掛けにしていた白布を奈保子に渡し拭いてもらう。

奈保子、ハンカチでプロテインを拭く

拓也 プロテイン、減ったよ。

奈保子 ……本当すみません。

拓也、プロテインをなおそうと冷蔵庫に行く。するとふと月例カレンダーが目に入る。今日の日付に「新月の儀式」と書いてある。

拓也 （驚いて） あっ！！！！！！

奈保子 どうしたんですか。

拓也 今日は新月の日だ。
奈保子 なんですか。

拓也は、白布の予備があるかもしれないと思い、儀式の棚を見に行く。
しかし、予備など存在するわけではない。

拓也 この布隠してて。

奈保子 えっ？

拓也 絶対に誰にもこの布を使ったことを言うんじゃないぞ。

奈保子 どうしてですか？

拓也 それは…やべ、誰かきた。

【8】

元気に追い出された芳恵は、食堂に行き部室に戻ってくる

芳恵 ただいま。

拓也 (ほっとして) なんだ、おばさんかよ。

芳恵 悪かったわね、おばさんで。奈保子ちゃん、その男と一緒にいちやだめよ。

男はね、ちゃんと選びなさいよ。

拓也 それどういう意味だよ。おばさん、男に相手にされないからって、僻んでるだけだろ。

芳恵 何いいよると？、食堂に行ってきたら、若い男がいっぱいいて、みんなに話しかけられたわよ。

拓也 あんたがはなしかけたんやろ。

そこにひよこ饅頭を買ってきた元気が戻ってくる

元気 ひよこ買ってきたよ。

拓也 おう、元気！

元気 （芳恵の腕をつかみ）なんでまだいるんだよ。

芳恵 （反省の色などなく）だってー。

チーフに報告を終えた葉子が戻ってくる

葉子 ただいま。あら、みんなそこに集まってなにしてるの。

元気 なんにもしてないですよ。

葉子 あっ、元気！

元気 はい！

葉子 毎日やっている、お祈りの話、新入部員にした？

元気 あ、まだですね。

芳恵 お祈り？

葉子 （深刻そうに）そうお祈り。はい、全員！注目！

全員が神棚の前に集まる

葉子 これは演劇の神様、うずめたらちねの命です。

拓也 エロいだろ（奈保子に）

葉子 静かに、、

拓也 はい。

みちるがメグミルク買って戻ってくる

葉子 みっちー、遅い、早く座って。

みちる
はい。

葉子 （芳恵と奈保子に向かって）すみません。この神様はね。演劇部にずっと昔からある神聖なものなの。誰が作ったものなのか、起源はいつたい、いつなのか、それはわからない、私の先輩の先輩も知らなかったの、昔からあるもの、毎日午後三時になったら、お祈りをするの。それがシキタリなのよ。

奈保子 シキタリ…。

拓也 もうすぐ3時ですよ。

葉子 今から私がお手本を見せるからよくみてね。元氣！

元氣 はい。

葉子 準備。

元氣 はい。

元氣が太鼓を準備する

葉子 いきます………はい！

葉子・顔の前に手を合わせて「ありがとう」×3する。

拓也・みちる・元氣 おおー（拍手）

芳恵と奈保子も合わせて拍手する

葉子 （芳恵と奈保子に）わかったあ？

芳恵 はい。

葉子 毎日メグミルクとひよこ饅頭を3時前にとりかえるから。これは新入部員の仕事だから、おぼえてね。

奈保子 はい、でも毎日3時にお祈りって、授業はどうするんですか

葉子 大丈夫、大学も認めてくれてるから。

芳恵 すっごかね。

葉子 すごいんですよ。

芳恵 それにしてもあのおっぱい、ほんと豊満ね。

奈保子 (眩くように) おっぱいきれい。

葉子 私も初めて見たときはそう思ったわ。

芳恵 (男子3人を見ながら) ちょっと、そのメンズたち私のを想像せんでよね。

拓也・元気 しねえよ。

元気 ……(どこまでもふざける芳恵にイライラ)。

葉子 じゃあ、二人とも私たちと一緒にやってみてね。

芳恵 はい。

奈保子 はい。

葉子 奈保子ちゃん、こっち。芳恵さんはこちらに。いくわよ……………はい。

全員 ありがとう、ありがとう、ありがとう、×3

葉子 気持ちいいでしょ。なんていうか、身体の底から、心が洗われるというか、身体の汚い部分がそぎ落とされるというか…そうでしょ。

芳恵はやってはみるものの、全く入り込めない。しかし葉子があまりに入り込んでいるので無理に葉子に合わせて答える。

芳恵 ……はい、とっても気持ちいいです。ね、奈保子ちゃんもそうだよ。

奈保子 (すっかり入り込んでいる様子) はい、キモチイイ。

芳恵 奈保子ちゃん！！しっかりしなさい！！

葉子 よかったわ。

元気 今日って新月の儀式の日ですよ。葉子先輩。

拓也 えっ。

葉子 あら、そうね、今日は新月の儀式の日だわ、これで全部教えられるわね。手間が省けたわ。

芳恵 （呆れ驚いて・・・まだあるのか）儀式って、また別の・・・。

葉子 そうよ、さっきのはほんの準備運動みたいなものよ。みっちー、あれとってきて。

みちる はい！

みちるが儀式の説明が載っている巻物を取ってくる

とても古い巻物で、高額の宝石を触るように、白い手袋をして丁寧に広げる

重々しい、雰囲気

葉子 よく覚えててね。今から、儀式の決まりごとを言うから。

元気 この儀式は、タミネ大、演劇部の神聖な儀式だ。演劇部員以外のものに漏らすことは、あつてはならないからな。

芳恵・奈保子 はい。

葉子 タミネ大、演劇部ーっ。

みちる・元気・拓也 ちちもくーっ、あ、五箇条。

葉子 ひとつ、毎週末の刻に祈祷怠るべからず。

みちる ふたーっ、その際、吉野堂のひよこ饅頭並びに新生メグミルクをお供えすべし。

芳恵 （奈保子に向かって）どうして、ひよこ饅頭とメグミルクなの？

葉子 それはわからないのよ。ただ昔から決まっているの。ひよこ饅頭は皮を食べて中身だけおそなえるの。

芳恵 なんて、皮だけ食べるの？

葉子 それはね、役者は舞台にたったら、丸裸も同然だからよ。

芳恵 私、脱げます！

奈保子 おばちゃん…！

元気 みつつー、満月の日には開胸、新月の日には閉胸の儀を執り行うべし。

拓也 よっーっ、ご神体、ウズメタラチネの命に触れるべからず、とりわけ乳首には決して直接触れるべからず。

奈保子 なんて、乳首にはさわっちゃいけないのかな。

芳恵 敏感だからよ。（吹き出し笑い）ぶっ。

葉子 儀式の最後にこの洗濯ばさみで乳首をつまむところが味噌ね。あと一つ最後に大事なことを言うからね。よく聞いてて。

葉子 いっつ、ご神体の包胸の白布は神聖なものであり、決して汚すべからず…この、五箇条のチチモク、守ってもらうからよろしくび。

芳恵・奈保子 はい。

葉子 じゃあ、準備始めますか・・衣装。

元気 はい。

元気は衣装を用意し、着る。葉子も指示出ししながら衣装を着る。

葉子 メグミルク・ひよこ。

拓也 はい。

拓也は冷蔵庫の上のお盆を芳恵と奈保子に渡す。

葉子 照明。

みちるは棚の上にあるライトを頭につける。とりかえた葉子のハンカチがばれないのか心配。

葉子 音響。

拓也は机の下にある太鼓を出す。どうやってごまかすか考えている。
儀式の配列になっている。

神棚

元気 葉子

芳恵 奈保子

みちる

拓也

葉子　じゃあ、神聖なる包胸の白布を出して。

奈保子　神聖なる白布…。

奈保子はいやな予感がある。プロテインを拭いた布がもしかしたら神聖なる白布ではないかと思う。

【9】

元気が引き出しをあけるが、白布が入っていない。

葉子　どうしたの。

元気　ない！

葉子　え？

元気　ないんです布が

葉子　なんですって！！ちゃんと探してよ。あれは歴代ずっと伝承されてきた白布なのよ。

元気　でも、ないんですもん。

葉子　どうするのよ、あれがないと…あれはどんなにお金を積んでも、どこでも買えない代物なのよ！！

みちる　…ちゃんと探した？

元気　探しましたよ。ほらほらほら（引き出しの中身を全部出す）

みちる　本当だ…。

葉子　部室をくまなくさがして！5年間続いてきたこの歴史が…奈落に崩れ落ちようとしてるのよ。

元気とみちるは神棚の下の棚を探す。芳恵は何が起こったのかすぐに理解できていない様子。

奈保子はさっき使った白布が神聖な白布だと確信し、鞆に入ってる布を守るように立ちすくんでいる。拓也は、ばれないように必死に探すふりをする。元気が慌てて探していたため、空き缶の入った棚を落としてしまう。部屋に音をたてて散らばる空き缶。

葉子 きゃー！神様がお怒りよ。早く、早く探すのよ。さもないければ、私たちは、一生踊り続けなければならないのよ。この人生という舞台で…。

芳恵は散らかった空き缶を片付ける。葉子は何かにとり行かれたように探す。みちるはどうしてないのか不思議に引き出しばかり見ている。

奈保子 あの布ってもしかして…。

拓也 しっ！

奈保子 どうするんですか。

拓也 絶対に言うなよ、今どうするか考えるから。

奈保子 ああ、もう。

拓也は、このどうしようもない状況をどうにかしようとでたらめな嘘を思い付く

拓也 そうだ！！みんな聞いてくれ

葉子 今、それどころじゃないのよ。

拓也 おれ、布の在りか知ってますよ。

全員が静まり返り、拓也に耳を傾ける

葉子 (拓也にとびかかり) なんですって、どこよ、どこにやったのよ。

拓也 今日な…おれ…朝みたんだよ(おそろおそろ言う)

葉子 何を。

拓也 この部室からでていく変な奴を。

元気 ということは。

拓也 そいつがたぶん、その布を持って行ったんだと思う。

芳恵 神様の布だけをもっていくなんて変な人ね。

拓也 たぶんこの演劇部をよく思っていない奴らだよ。俺たちがいつもお祈りしてるから…。

葉子 ふざけんじゃねえよ！見つけたら叩きのめしてやる。シュッシュ（パンチの音）

拓也 わかったわ。とにかく、そいつ、どんな感じの奴だったの？

元気 どんな感じって、えーと。

拓也 思い出せ。

葉子 えーっと、確か…顔が面長で…。

みちる みちる！描いて！

拓也 あっ、はいはい

みちる パソコンに向かい絵を書く

拓也 目は、えーっとちいさくて、それで鼻は魔女みたいに高くでかい、でー、口は井

上和香みたいに、…プルンプルンだった。そんなもって…。

葉子 そんなもって？

拓也 色グロだった！

みちる すぐに印刷、全員にくばる

芳恵 早っ！

葉子 よし、これでOKみんな！！探しに行くよ。

元気 らじゃー。

芳恵 新学期早々、大変ね。

葉子 そんじゃみんないくわよー！

全員 おおー！

ものすごい勢いで拓也と奈保子以外出ていく。

拓也

（わざとらしくみんなに聞こえるように）どこにいったんだー。絶対見つけてだしてぼこぼこにしてやる！！

と言いながらドアを静かに閉める

【10】

拓也

ふうーなんとか、しのげたな。

奈保子

…どうするんですか、あんな嘘ついて。

拓也

しゃーねーだろ、あそこで俺らが「雑巾にして使いました」っていったらどうなってたかわかんないぜ。

奈保子

そうですけど、私あんなに大切なものだって知らなかったんです。なんであの時、大切な布だって教えてくれなかったんですか。どうしてですか。

拓也

だから、黙ってれば大丈夫だって。

奈保子

だめですよ。そんなみんなをだますようなこと。みんな一生懸命探しますよ。ねえ、先輩。どうして私にあの布で拭かせたんですか。わたし、もうどうすればいいんですか。

拓也

うつせえな。黙ってれば、（奈保子を見る）ばれないんだよ。

奈保子

……。

ドアの隙間から、盗み聞きしていた芳恵が入ってくる

芳恵

その話させてもらったよ！

奈保子

おばさん……。 （芳恵に抱きつく）

拓也 えっ！どうしたんですか、石川さん。

芳恵 あんたたちが神様の布もつとるんやろ。

拓也 えっ、なんのことかな。

奈保子 そうなの、おばさん。

拓也 こら、馬鹿お前。

芳恵 もういいって！（拓也に）なんで、みんながおるときに正直にいわなかったの？

奈保子 私、あんなに神聖なものだって知らなくて。

拓也 ……

芳恵 どうするの？

拓也 どうすればいいのかな。

芳恵 しょーがないね、この子たちは。今回はあたしがちゃんと話してあげるけん。

拓也 やめてくれ。

芳恵 私が知らんで、とってしまったことにすればいいやろ。

拓也 それならよし。

奈保子 でもそれじゃおばちゃんが…。

芳恵 大丈夫。

拓也 （元氣よく）ありがとうございます

芳恵 あんた、ほんと調子いいね、それで、神様の布はどこね。

奈保子 これです。

奈保子が白布の入ったビニール袋を鞆から出し芳恵に渡す

芳恵 わかった。あんたたちは外に出てなさい。探してるふりしながら戻ってればいいから。

奈保子 はい。

拓也 （元氣よく）うい、むっしゅ。

どんなふうに謝ろうか試行錯誤している芳恵

【11】

犯人捜しに行ってきた葉子・元氣・拓也・奈保子が戻ってくる

葉子 どこのだいっだよ。まったく、顔が面長の色グロどこだ。

元氣 先輩、やっぱりいいですよ。

拓也 ったく、まじ見つけたらぶん殴ってやる、シュツシュ。(パンチの音)

奈保子 ………。

芳恵 みんな聞いて。

拓也 どうした、どうした！

葉子 どうしたんですか？

間

芳恵 …ごめんなさい！

皆 ………。

芳恵 (ビニール袋を出し) これ…私が、間違えて、お茶こぼしたときに拭いてしまったんよ。まさかこんなに大事な、ものだとは知らなくて、本当にごめんなさい。

全員 ………。

拓也 …やっぱりお前かー！

奈保子と芳恵、拓也にあきれる。

拓也 薄々はきづいっとったんや。(葉子に向かって) 朝、演劇部に忍び込んだんですよ。ほら見てみい、この似顔絵、そっくりや、面長の色グロや、おれは驚きを隠しきれな

い
葉子 …信じられないわ。

奈保子 …。

元気 退部やね…。

芳恵 私…、私は、身代わりになるためにきたんじゃない。この演劇部の真ん中にポツカリあいた穴はあまりに大きすぎて誰にも埋められない。穴のことを忘れるのは簡単だけど、それではいつまでたっても向こう側には渡れない。だから私は、ロイター板。

全員 ロイター板？

拓也 なに言ってるんのおばさん。

芳恵 跳び箱の手前に置く板よ。この板を強くければけるほど、高く遠くへ飛べるわけ、どんなに強くつけたって、おばさんだから壊れないのよ。

拓也と元気が芳恵を部室の外に出そうとする

拓也 来いっ！

葉子・奈保子はその様子を見守る

そこに、犯人の似顔絵と血のついた白布を持ってみちるが慌てて走ってくる

【12】

みちる 見つかった。見つかったよ！見つかった。

葉子・芳恵・元気・拓也・奈保子は驚いて口が開いたままになる
みちる、似顔絵を指差しながら、

みちる この顔の男が持ってた。すっげー足が速くて、苦勞したよ。

全員 ……。

みちる 一発殴ってやったよ。頭に來たからさ。そしたら、ほら血がついちやった。

葉子 どういうこと、神様の布が二つあるって。

みちる え……？

拓也 どういうことだ。

葉子 ちょっとみせて。こっちも。

葉子、白い手袋をして、みちるから白布をとり、芳恵からもビニルから白布をとりどちらが本物か見比べる。臭いをかいだり、落して重さをはかったり、BIS溶液をつけたり……

葉子 ……。本物はこっちよ。

元気 どうしてわかるんですか？

葉子 だってほら、これ（芳恵からもらったほう）私のハンカチ、葉子のY、イニシャルが入ってるでしょう？

拓也 あ、本当だ。ってことは、こっち（みちるから受け取ったほう）が本物か。

奈保子 なんかよくわかんなくなってきた。

芳恵 ちょっと見せて。

葉子 なんですか。

芳恵 これ、あんたのって言ったよね…。

葉子 そう、ですけど。

芳恵 聞いてなかったね、あんた、苗字は？

葉子 柏原、柏原葉子。

芳恵 このハンカチどうしたの？

葉子 それは、死に別れた母の形見なんです。私は生まれてすぐに父方の祖父母に預けられたんです。そのハンカチは最初で最後の母からの贈りものだと思って、大事に持ってるんです。……天国で見守ってね……おかあさん（遠くを見る）

芳恵 ……（嘔み殺して）ここよ。

葉子 なんですか。

芳恵 ここにいるよ！母さんはここにいますよ！

葉子 えっ、

芳恵 そう、あれは25年前、柏葉孝という男と出会った。私が初めて愛した男、私があなたを産んだのは19の冬、あなたを守り切る力が私にはなかった。ごめんね、ごめんね。

葉子 おかあさん、おかあさんのね

泣きながら抱き合う、芳恵と葉子

芳恵 元氣！元氣来なさい！

元氣 どうしたんだよ。かあちゃん

芳恵 あんたのお姉ちゃんよ！

元氣 ……ねえちゃん！

葉子 ……弟！

元氣 ねえちゃん！

葉子 弟！

奈保子が芳恵に「一人目の夫の子」と書かれたプラカードを渡す。

三人で感動にひたる

みちる 元氣くんは芳恵さんの子どもだったんですね

拓也 えっ！そうなの、

みちる そう、らしいよ

拓也 いいなあ、俺、生まれてすぐ、里子に出されたんだ。だから本当の親には会ったことないんだ。わかってるのは、双子の兄さんがいるってことだけ。

芳恵 双子？・・・でも違う、羽賀拓也だものね。私の子供は研二、違うわ、違う違う

拓也 おれ、里親に貰われた時、名前が変わったんだ。生まれた時の名前は

芳恵 生まれた時の名前は？

拓也 研二、

芳恵 研二？

拓也 里親の羽賀家に貰われてすぐさ、なんか画数が悪いってことで、拓也になったんだ。

笑っちゃうだろう……どこにいるんだろう。双子のおにいさん

芳恵 ……ここよ（かみ殺して）

拓也 なんですか？

芳恵 ここにいるよ。双子の兄さんはここにいますよ。

拓也 えっ

芳恵 そう、あれは20年前。二人目の夫、野村真彦という男と出会った。私が二番目に

愛した男。私があなたたちを生んだのは25の春。でも、あなたたちのお父さんそう、野村真彦、あたしと同じ職場のホステスと駆け落ちして、私は母ひとり、とてもあなたたち二人を育てられなかった。ごめんね、ごめんね。
拓也 おかあさん、おかあさんなんですネ？

泣きながら抱き合う、芳恵と拓也

芳恵 元気、元気来なさい！

元気 どうしたんだよ、かあちゃん。

芳恵 昔、言ったことがあったよね。あんたには双子の弟がいるって。

元気 えっ。

芳恵 紹介します。あなたの弟の研二君です。

奈保子が拓也に「二人目の夫の子（元気と二卵性双生児）」と書かれたプラカードを渡す。

葉子・元気 ええー！ー！！！！

拓也 ただいま、かあさん。

葉子 弟が増えた。

芳恵 ごめんね、ごめんね。

芳恵、葉子、元気、拓也の4人、泣きながら抱き合う

みちる なんかたいへんなことになってきたね。奈保子ちゃん。

奈保子 ……

みちる どうしたの奈保子ちゃん。

奈保子 おばさん、知ってたんですか。

芳恵 あたりまえじゃない。

元気 どういうこと？

芳恵 この子のお父さんはあんたたち二人のお父さん、野村真彦よ。

拓也 ということは。

芳恵 紹介します。あなたたちの妹の奈保子ちゃんです。

奈保子 改めまして奈保子です。

奈保子が自分で「二人目の夫が違う女と駆け落ちしてできた子（複雑）」と書かれたプラカードを自分でかける

奈保子 これからお母さんって呼んでもいいですか？

芳恵 いいわよ。

奈保子 おかあさん。

葉子 家族が増えた。

芳恵 ごめんね、ごめんね。

芳恵、葉子、元氣、拓也、奈保子の5人、泣きながら抱き合う
この様子を見ている。みちる

【13】

芳恵 あとはあんただけやん。早くしてよあんたは、なんか、そういう複雑な生い立ちはないんね。

みちるの考える間（みちるを全員が見る）

みちる ぼく、ぼくは、、、
全員、興味がなさそうにそれぞれが勝手なことをしだす。

みちる 僕が1歳のとき、家が火事で燃えた。そのとき、僕のお父さんとお母さんは死んだんだ。そのあと僕は施設に預けられた。5歳のころにお姉さんらしき人から、手紙が送られてきた。その時僕は、はじめてお姉さんがいることを知った。赤ん坊だった僕を火の中から助けてくれたのは、その姉さんだったと、あとで聞いた。お姉さんは高校を卒業してすぐ、ホステスとして働いていたらしい。8歳の時、僕は里親の河合家にもらわれて行った。

芳恵 お姉さんの名前は？

みちる え…知らない。

芳恵、みちるにあわてて駆け寄り、シャツをめくり上げ、背中をみる

みちる なにするんですか！？

芳恵 やっぱりね。この背中にあざは、間違いない、あのときの火傷のあとね。あなたみちるなのね、弟のみちるなのね。私、名前を聞いてなんでおもいだせなかったのか

しら。：私もずーっと、気になってたんだけど、自分の生活にいっぱいいっぱい
会いに行けなくて…。

みちる お姉さん、姉さんなんですか？

芳恵 紹介します。あなたたちのおじさんのみちる君です。

みちる 改めまして、おじのみちるです。（全員に向かつて）

奈保子がみちるに「弟（および、みんなの伯父さん）」と書かれたプラカードを渡す。

みちる これからお姉さんって呼んでいいですか？

芳恵 いいわよ。

みちる ねえちやー！ーん！！！！

みちると芳恵は抱き合って泣く。

葉子 おじさんだった！！

芳恵 ごめんね、ごめんね。ぬあああああー（涙）

奈保子が芳恵に「母（及び姉）」元気に「二人目の夫の子（拓也と二卵性双生児）」と書かれた
プラカードをかける。

芳恵、葉子、元氣、拓也、奈保子、みちるの6人、泣きながら抱き合う

全員、新月の儀式の体系に並ぶ

暗転

【14】

下手奥の机でうたた寝していた。みちるが目を覚ます
起きてすぐにご神体を見るが、そこには〇〇がある。

缶積みを始めるみちる。
そこに元気登場

元気 おつかれさまです。

みちる おつかれさま。

元気 新学期ですね。

みちる うん。

元気 今年、新入部員入りますかね。

みちる どうか。

拓也が入ってくる

拓也 おつかれさまです。

元気 おお、拓也。

拓也 新生のオリエンテーション終わったって。

元気 じゃあ、そろそろ行きますか。

葉子が入ってくる。

葉子 あんたたち、なにぼさつとしてんの？新入部員いれなきやこの部潰れるわよ。

元気 今、配りに行くところです。

葉子 じゃあ、あたしもいく。

拓也 よし、いくか。

ドアのノック音がする。明るくはつらつとした奈保子とどこにでもいる普通のお母さん芳恵が入ってくる

奈保子 こんにちは、ここ演劇部ですか？

葉子 そうですけど。

元気 もしかして入部希望者！？

奈保子 そうです。よろしくおねがします。

みちるは奈保子を見るなり近づいて

みちる …名前は…奈保子ちゃん？

奈保子 いいえ、梨華です。

みちる そっか…

拓也 こちらの方は？

奈保子 私の母です。

芳恵 どうも、娘と一緒に大学に入学したんです。よろしくおねがいたします。

みちる お名前は…芳恵さん？

芳恵 いいえ、後藤まつ子ですけど。

拓也 どうしたんですか？先輩。

みちる ううん、なんでもないよ。

葉子 今から、新入部員のチラシ配りに行くんですけど。

奈保子 私たちもお手伝いさせていただきます。

元気 こりや、有望な新人が入ってきたな。

葉子 じゃあ、行きましょうか。

全員でビラを配るためにはけようとする

葉子がYのインシヤルのついたハンカチを落とす

芳恵 おちましたよ、ハンカチ。

ハンカチを拾う芳恵

拓也・奈保子・元氣・葉子ビラ配りに行くために部屋を出ていく

奈保子 (声のみ) いくよ、お母さん。

残された芳恵とみちる。

どこかで会ったような、何かが二人から始まりそうなそんな予感を残しつつ・・・

暗転

(完)

「ダ・ダン・ダン・ダダン！」
公演記録

九州情報大学演劇部

F-Stage

第12回公演

演出：佐々木 空



2008年11月15日
太宰府館 3F まほろばホール



この台本の上演を希望される場合は、下記までご連絡ください。

(連絡先)

f-stage@hotmail.co.jp
090-5267-2424

(F-Stage HP)

<http://www.ekiis.com/~F-Stage/>